『國民新報』1940年1月7日

[主張]　紀元二千六百年

　十五年！それはかしい二千六百年である。に三十年にる。ものである。のにそのにかんとするであり、のである。一のはを一つにして、一につたので、をれてをしなければならぬである。るがにこそこの紀元二千六百年はがいのである[[1]](#footnote-1)。

　二千六百年！すめらみくにはとの一をつて、彌える日につた。やづアジア十の族を、ありがたきののにし、この神津のあら[た]かさとしさととを、くにけやうと、はつたのである。のをよ。ありがたいがにあるか。こののとしてをこのにけたことはんとせなことであらう。になさにこぼるゝことである。

　三十年！二千四百萬はのありがたきによつて、こののとなつたのだ。そしてや　のたることのにありがたくあることであるかをからずることゝなつたのだ。のは、わがのために、みづく、くさむすとなることをびむことゝなつたのだ。そしてはえあるをり、千に八千に、このの彌榮えをすところのなるとのとなつたのである。

　朝鮮の民よ。古き小さき感情をば、この時にこそ清算せよ。そして祓清められたる新しい、大きい心に生きやう。今や吾等の故郷は小さき朝鮮半島でないのだ。日の丸の御旗の閃く所そこは皆吾等の故郷であるのだ。北は千島、南は新南群島の果てまで、凡て吾等の子孫の守るべき樂園であるのだ。一億の天皇の赤子は凡て吾等の同胞なのだ。吾等の子孫は、忠と力とさへあれば、帝國を背負つて立つ國家の中心人物にもなり得るのだ。未だに取除かれて居ない多少の差別を苦にしてはならない。吾等の忠誠は近き將來にこの差別までも一掃することであらう。而してそれは唯だ吾等の忠誠だけなのだ[。]廣大無邊たる天皇の仁慈は、吾等二千三百萬の朝鮮民衆をば完全なる一視同仁の御懐に抱き給はん日の一日も早からんことを御待ち遊ばさるゝことゝ拜察したてまつるだに畏いことである。

　さらば朝鮮民衆よ。皇紀二千六百年を吾等は何によつて壽ぎ、何によつて記念しやうぞ。それは他ではない。益々積極的に、天皇に對したてまつる忠誠を奮ひ起して、立派な、頼もしき臣民になり切ることにあると思ふ。

『國民新報』1940年1月14日

[主張]　小學校の先生方へ

　はいのとのをのにいてこのをする。このはれも二十二三ののである。そしてで、それぞれがんでるであり、このとふのにぶつかつて、非にきなにつたのだ。であるはかのでしたはなかつた。よしやがあつたにしても、それはのさで、つてのけることもるけれども、いざをつになるとさう[は]かない。のからればいになひはさせたくない、れる達にもははせたくない。々ののことなどもはれる。

　そこであなたはのをへることゝなる。一にしてへばもつとのるがしくなるのだ。そしてくはをしてまでへかうとするのである。をればもつといがへてやにをさせずにむだらうとふのだ。これは一づけることであつてににへない。のやうなのではにのなことである。

　さて、にいて一げ[た]いのだ。それは、あなたはをどうてるか、そしてのとふをなんとてるかとふことである。

　がづくでめられるものならば、にしきものはないであらう。かのりなきしき達はれも一ををうてしたものなのだ。にがづくで、してられるものであるにしても、がしてととをすなものであらうか。にはしくてなものよりも、めるがになものがいとふをはつきりとしなければならない。

　のはへられたるつとめにをめていそしむことだ。をすはしてゑることはない。ののためにをちんでるに、して、してにするなことはないのだ。それは、このはのしふであり、このはのしろしめすであるからである。をじ、にりまつツて、へられたるのために一をげる――をしてももちむものならば、ず、のほまれもあることであらう。ましてやこそは、のあらゆるのでもななるにいてをやである。

　であるから、！どうしよう、やをにしやうなどゝひつてはならない、なな、にすればわがをくかう、このをばのにはしくしげやうとふことばかりにせよ。をひ、をよう、のことをにしやうか、たるはに、などふことはてにしまつれ。一つのにをげるものは、ずやのになることをぜよ。

『國民新報』1940年1月21日

[主張]　新内閣の使命と國民[[2]](#footnote-2)

　は、變をに、の、のをとして、した。變とはふまでもなく、のであるが、そののが、のたるべき汪のである。汪は蔣にして、のをして、にらざるべからざることをき、し蔣にしてかざれば、をせんをしたことはすべきであるが、それにしても汪のてんとするのにしては、まだまだとむつかしいがはつてゐるである。こののが、一にのおをつてるである。来事變はがになつてたのであるが、のによつて、ののがのとなるやうにはれる。

　としては、のにより、日、日、ソのがであるが、いづれもだがかずに、のにきがれた。はだに蔣とれをしてゐないし、はもらずにしつた九ケのにこびりついて、一二十六日よりの日をつてゐる。ソとのはしてるではあるが、ののは、これまたのにつてるのである。

かくのく、、ソにするは、變とするであるが、もそのにいて、してそれにるものではない。にとつてはこそろくのものをつてかねばならぬがあるのであつて、こゝに一のとがある。のおのであらう。

にであるが、これにいて、はかうふことをされた。、くしてかう。があるにはある[、]ないにはないことのないに、そしてくしようと。にのあるで、これにきるとふ。ととと。とは、のであり、のをにすることは、のであり、難にへることはのであることはふまでもない。はそのにいてとをけ、をとすることによつて、をしてにするをはしめ、をにすることによつて、をに、をにゑることによつて、ののをにたせて、來のとなつた、のをめようとし、思のたるをして、のをらしめ、によつて、にをらさせるとふににのをしたものとへる。

しながらにで一ながたにしても、のが、のにつてくこれにしなければははれるものではない。の、の、□の、のが日ののやうではいけない。たるものはよろしくの、のためにずるのをひこして、をして、こんどこそは變のにするやうしなくてはならない。

『國民新報』1940年1月28日

[主張]　英國に抗議する[[3]](#footnote-3)

を、しかものにいてしたるはをうろついてゐるである。このきはしばらくまりかへつてゐたのをつた。

、、がくの、なるをにきけたことはであるが、ひつたが一のでみるともはれぬ。そのまりなきにい一をぐさときみ、ぎつくりとさをらさなければならない。

　が、やをめるでした、は、のることをらぬとはれるそのよりもきいである。かゝるろしきは、のによつてはれざるをないであらう。三をじて、されたるのがにするだけでも、にのをちおろすにりる。々とが敵たる蔣をしてゐるをば、がにるまいにしてゐるのか。でしたわがのの一だけでになるにをせてやつたではないか。

　やのはにりつてる。ドイツとふとして、々とのにふことをせず、なきのにしてのみをつてゐるのが、でなくてであらう。わがもらくはかかる劫のとなつたものとはれる。

　アジアにするを一せよ。それがであるは蔣にをするものであり、それがであれば、なきをふである。ユニオンジヤツクが、ののに、にをい來をはざるり、その一のをも、シンガポールにまらざらしめよ。わがはにこれをしてりあるである。

　のをるゝか。のは、を導とするのをすることにある。このにいて、はとなのだ。のはから□るものであつて、からまれてるものではない。さればとてにをすことは、わがにることであるが、のをして、をするは、われの魂なのである。、、これに蔣そのをひせば、わがはにをはれるではないか。かれはやれんとする老の□□であり、われはにに□せんとするのひである。われにあり、ひまたわれにあり、てにむべきであつて、□るまい、るまいなどふべきではない。

『國民新報』1940年2月4日

[主張]　誠心の紀元節

　年のは二千六百のである。一のとを一つにして、のとにまりなきをぎたてまつるである。

　二千四百萬も、にしてより三十とふもののにれば々一であつた。三十年とふのはくれて、び一になつて三十年とふことである。ちるにいては、はしくにはつたともへるが、のにいてはにつたのであつて、のをにこのをとすべきである。のでもなく、でもなく、であるとふにひり、それにふさはしきととをつべきである。

　かくすることにいて、は、とか、とかふ、せせこましいからして、とふ々としたがのある一になるのである。これはからなしてれるのではなくて、でなるのである。はなり、のなりとをてするに、なるのである。

　しながら、なほのをせざるものは、それこそをし二千四百萬をし、いて、をするものとふべきであつて、にのの、紀のとはねばならない。

　しかのみならず、はのなり、はれてのなりとのびはから發せられるものでなくてはならない。の參、の、、のてからづるものでなくてはならない。それが、にうはべであつたり、であつたり、であつたり、このりであつたりしてはならない。なんとなれば、それはをきをき、のをはることになるからである。

であるから、のをば、々はののにしよう。から、のから、にをひ、をるにをてせんことをはう。にのにいても、を一して、にぢず、にずるのののをさう。して二千六百年より、には、にはいつはりはなかつたとにせしめよう、二千は六百年より二千四百萬はにり、にのとなりつた、とにせしめよう。

よ！

『國民新報』1940年2月11日

[主張]　建國祭の朝

　二十一日紀。これは紀二千六百年のの日である。このはわが一のは一にとととでごすべきである。

　になもい。一々へなくても々はるに、はをされて、はにれて、にぶくののをる。るに々はなんとであらう。ゆるなのとして、へばつのとしての、をしてるのである。この、のおほまへにましくをち、宮にひつてしくを曲めて、のをげまつらう。きのにをけたことのにありがたく、なきかをしみじみじよう。

　にはない。あるものにするのみである。がえにえて日につたのは、一はすもし、々のがくをつたである。してのみがのするところではないのである。であるから、日ののをぶものは、にのと、のにをぐべきである。

　はである。がきにるゝがく、がにえるがくである。あるにとをけてをめたまふ。しながら、一そのをはんか、はそのとをひたまふのである。日はがにアジアをむるととをたまふた。それはわがのと、のによつてである。がはこのにをさねばならない。とびのにも、のをつてはならない。

　はにまします。十のにまします。一ののにまします。にははありない。をふのあるものはわれわれののみである。々にしてをへば、をしたてまつることはない。やはとふにをしてるのであるが、このがやかにするかかは一につて々の――のにあるのである。一つて、にふことにしてのみ一であるだけでなく、四のをしし、これにのをさせることに一でなくてはならぬ。一が、のなることにいてのく、にいてのく、にいてのく、にいてのく、にいてのきをてかからねばならぬ。

　このにり、々はをとして、とをげよう。

『國民新報』1940年2月18日

[主張]　仁愛と忠厚

　紀二千六百年のにり、が一のはくも、ありがたきをした。にのりである。

　の宏謨とをびりてのにひはせ、がのをけいでのにいることをしたまうたこととする。

　にきてのをらず、にりてをせず。にかあらんとふはのであらうが、それはのではないだ。がるもの、くるも、しむもて、のにまします。の、、、等、すべてにつて生きむところのもののにあらずしてなんぞ。のとはのである、よりにるまで、々々、々々、々々、はののにししてるのである。もの四の一としてのをへたまうた。をてとなすとは、のにじることからまるものである。

　はをてをみたまひしろしめす。かゝるのにしりはをてへまつりいまつるのである。

　さてのはのひるでなくてはならぬ。とはににしたてまつるだけではない。すべてなるものはをてにみなるものはをてにへよとふかとする。、、、、、、すべて、のにつてるのであるが、それらのにいて、とのをてするのが、にいたてまつるかとんでふのである。

　このありがたきはくも、々にはつたものとすべきである。さればにのありや、のありや、の宏謨ととびたてまつるや、のを切くるはがめなりとのありやを々にするのが、をするのであるとふ。

　かくしれば、々はたるものあるにくことゝふ。のがしてるのではないだらうか。はにいて、はや、やにいて、もつともつとのをしなければならぬとふ。米、、々ののにしてをせられ、にひらむことをつた。これはち々につてなされたことであるが、に・・にいて、のをなしてにひたてまつることをすべきである。

『國民新報』1940年2月25日　[主張]　皇民化の一路

議にいて議議のにいてしたるのにしてかれるをてむべきではないかとふにして、や、はとふをてこれにへた。ち、はにいて、くをしたし、またにいても、のをてのとしてゐるとふのである。そして、それはちの一のスローガンであつて、にくべきである。

　は、でのにし、のをて、ののをされた。ち三千のに九萬くのがあつたことである。このことはよりもにのをするものである。

　やの一のは、であつて、これもももに一するところである。さてはそのであるが、それにいてととのを綜すれば、の一にきるもののやうであり、そしてそのはのと[]をじてのにあるやうである。は十七までに、の六をするまでに、をし、二十五にはのをるだらうとのを、びされた。のでは、よりにをし、四百六十萬ののにらしめることになつてゐる。これによつてれば、十ケをして、のをせんとするとすべきである。

　一にいて、のが、一四百、二年六百より三年のには一三千となり、のによればの年よりはを一して、四五年にはとらざるにするとはれてゐる。

　はり、をれば、の[と]つてはにされるのであつて、そのしはににいてゐるとはねばならぬ。るところはにけるとである。へればにいてはにして、そののための、あらゆるをしてゐるのにして、はととそしてをていなければならない。こゝにのみのとがあるのである。

『國民新報』1940年3月3日

[主張]　知識層の孤島[[4]](#footnote-4)

　いつのにもの はあるものである。現世にをいて、をとし、にるを屑しとしない[[5]](#footnote-5)もゝの一である。これらはらくまつて、をもつてをんでゐるものである。のやのなどによくられたものだ。

　しかるに今日にいても、かゝるのがされつゝある。それらのはいづれもで、をもつてらずるもので、のでしてゐたものであるが、のにしがしつゝあつた一より きりにされたものである。はのが、いつまでもおのがにあるものと、をつてゐるに、はしいにつて、いにいてけぼりを喰はして、ずんずんといへんでしまつた。そしてこれらのはぽつねんとのところにりされたのである。

さて、これらのはにしたらいゝのか。からはいづれもくの用をかけてしたであつて、そのててしまふことはにないことである[。]なんとかしてをびにてなければならない。

ところがこれらの、されんとするにをれるには、づしくをさせることからまらなくてはならないが、つたことには年のをけたのとして、にがあり、はからへびかれるべきでは ないとして、くのをして、一のや では、そのをかすことはないし、これらのははよりもであるとして 々んでもれないし、よしや んだところで、それにされるやうなことはない。

らばにすれば、このののをびにびすことが るか。それはなるのにたなければ ならない。ちとによつて のみなしられることである。しかも、このの にするのはでなければ ならない。これらのがをするのでなければ はせられない。

このの はをじては百をえぬかもれない。はそのなものは 十かもれない。しかしにはかれなかれ、のをもつてゐる。である から、がないといつて、して、ほうつてけといはるべきでは ない。のがければはになるものである。

『國民新報』1940年3月10日

[主張]　間違つた求福術

　二十とか、のとかひら、いろいろながはれてゐるのはかはしいりである。しかもそれがなるならいいざらず、々たるにはれてゐるのである。たとへばので、たまたまの折をつてかゝる馬鹿しいがいよいよをしめた。やをりかへるのなら、もらう、ののやので、がにずることがあれば、のはなしにはされてしまふであらう。ののに一をへたり、らしたりして、のをするとふのとじく、にらしいである。

　どうして、こんな馬鹿しいことがはれるのであるか。それはからであることであるが、それよりもろしいがこののをなしてゐるのだ。それはである。とはのをへないことだ。

　をらずしてをひ、をりつゝをけようとすることである。のをらずしてをひ、せずしてをみ、をむことなくしてをちんとすることである。

　これがといふもので、あらゆるはこのからずるものである。のをへないからやをてにする。によつてとをらうとするから、となるのである。とはにのをすのみでない。、のひによらずしてはをせんとするがきはてである。そなどすことによつて、ののやのによつてをふきは、まづにかゝつてゐることであるが、かういふ人はまたにもをひねまじきものである。なんとなればとのひによらずして、をるからである。

　のはにとへのをる。このをめなければは々の一をるであらう。しきへのとしきのをせもつてこそ、このをすことがるとふが、いづれにしてものをにゑけることは、にしても一一をひ、にしてはをるである。

『國民新報』1940年3月17日

[主張]　朝鮮の佛教[[6]](#footnote-6)

　その、はのえたであつた。、、、、、のをし、のにのをゑけて、三、そ一千年をじてのたるをりしたのである。

　のに、めてにをしたのはであつて、にをじたてまつつたのはの[[7]](#footnote-7)である。

　るにののはなるにあるのか。のをとして、のがのをなしたは をしむべきりであるが、はのととをへられたるにもらず、つての一をりつゝあるごとくゆるはであるか。がをにするのはまだしもとして をひ、をき、をけ、としてのをみず、さへもすべきひは、にいてえざるばかりでなく、となることさへ どといふである。なるやには、のをむべきものがあるが、いはゆる、のにりては、どのをさへめてゐない。とふづべきであらう。

　をめ、のがのにしてゐたのが、のでされたのはありがたきせであるが、侶たちののは、のにらなければならない。つにしてましいことは、のにするのであるとふ。

　のとはか。一に である。をばしたり、バリカンりに することをじて、にて らしむべきである。二はのである。やの をじ、で いはゆるのをし、をさすべきである。そもそもかゝる のは、に のためにであるばかりでなく、に一のをつての である。をして をることによつて、のをおこさしめることである。それはまた にの のきけともなるものである。かゝるのは そのものの取締と ることがない。のひをしたはちにより るべきである。

　やは のため、のため、なるきをする となつた。ことににいて りである。もせず、もへず、もせず、のもへず、かゝる はのである。かゝるは 一もくよりくべきであり、らに のをつて、やのをのみ するなるたらしむべきでない。

　のをすとに、が一のをかむことを んでまない。

『國民新報』1934年3月24日

[主張]　卒業生への言葉[[8]](#footnote-8)

　やをしたものもあらう。をへて、それのへらずにへるものもあらう。またはをたゞけでのをりらうとするもあらう。これらの年をひつくるめて、とびかけて ゐることゝされたい。

　のには、のとれてのをがなくともいものもあらう。しののは、まづ一ににあるものとふ。をしなければ、あたりふにるといふもだが、のをするもまたにあるからである。のをめつゝ、のをしやうとするのが、のなのである。

　で、のは のこと、一に難の をたやうであるが、それでもり難は難である。々ふやうなが々をつてゐると いふやうなのいことは まれるものでない。これがをへた につて、もなみであることはすべきで あるにしても、しかしこのみのを にするのは、もっともつたへであつて、にあるとするのがしい である。さへ、するにる、なで あるとしたら、に難のであつても、して決してにはぐれることはないと思ふ。

　るは つた。いのなどをつて、をしるものにな はないと。〝はこんなです、どうぞ しさい″といふでやつててひたいと。これは にはふべきだとふ。のと と、これがをめるが むものであつて、いのにつてを せんとするやうなないものにはない である。のがをつたのも、はのことで、までもといふのが、の だといふことを、されたい。のとのを るは、よしんばまぐれあたりににありつくにしても、來のは ないのだ。はどこまでもののである。

　の二のみはであらう。でも、の をふのは、のとりはないが、のはののになるべきで、してを んではならない。まづのをはつきりとめて のにかゝるべきである。さへき人ならばきは□にあたるであらう。

　するに、にしても、にしても、はたまた、のに しても、籤きとつてはならない。それは籤きではなくてきなのだ。のこそ のをするものなのだ。

『國民新報』1940年3月31日

[主張]　汪政權の成立[[9]](#footnote-9)

　のなんて いふことばは、である。のとつてても らない。の とでもふべきか。は、この三つをはせてへるのが、もつともで あるかもれぬ。いづれにしても、にばしいことで おいことである。にのために ぶのでもなく、はたまた三くのととを、にして つたのために ぶだけではない、にアジアのために、いては のためにぶべきことである。

　し汪にして たなかつたならば、のは にきかつたことであらう。のにびかけた、をじ に應へて、汪のきなるが ちがつたればこそ、こゝに ののをぐはたのだ。この汪をとした、ののに のをげるとに、だに、につて 弓を射るからめずに、をにれつゝあるところの、蔣一のを さざるをない。

　の、のの にてめらるゝの のするまで、のいたはして決してには らぬである。このは、がするき、をとするのではないことは、、のと、つて それがたる汪のによつて らかである。このは、のだ。ののたる八紘一といふ のためのだ。かるがに にはと いふものもなければ、といふものもないのだ。が になつてても、一もへ くことはないのだ。だとして、すべてのてするを することあるのみである。

　の のをふにあたり、は一、の のをめなければならぬ。かしき ののにしつゝ をそれにし、して、このののため、して のをめ、あらゆると にんでへるをえねばならない。

　にわがは々の がにはつてるのだ。にに、にさうであるばかりでなく、くくはにもながはされることを されてゐる。たるもの、このの、にして、しく、のをせねばならない。にこれは千一のであつて、のために、もつともあるであることをせねばならぬ。

　の來をすると に、々のをばう。

『國民新報』1940年4月7日

[主張]　青年の道――ま違つた強がりと見榮を排せ[[10]](#footnote-10)

　まづ一にのとなるものは うやうやしさ、つゝましやかさである。のに あるときのであるが、われわれは どんなにも、このを たまほしきものである。しわれわれが、なる にいても、のにあることを れなかつたならば、このうやうやしさ、つゝましやかさを はぬであらう。そしてはず、をくとか、ふしだらなざまを しないであらう。かく『をむ』ことが にけば、からから、一種の々しさをするやうになつて、にしくもしいをへるやうになる。

　ところがのくはけからして だらしがなくて、ちきで、きがなく もものごしも、ひもでがない。このでを つたならば、してさるべきやにはなれないであらう。ものひのやうであり、そのは でなければ、となるのである。

　とはして だらしないことでもなければ、やなことではない。はにいて、うやうやしくて、虔しやかなこそ、なすべきこと、なすべきとじたには、ののでもでり、することもなければ、びくびくと えらないといふこともない。にしつかりと、きつぱりと、あつさりと、のく やつてのけるのであるが、これこそのとはいふのである。

　をじ、るをき、一つのに從つてするで あつてこそ、かゝるうやうやしさ、つゝましやかさと になさをすことがる。にをり、がりをひ、したことにもになるやうな、は ブリキのやうなもので、はさうでも、しいにつたが 、ぺちやんこにへこんで しまふものである。とと、これあつて、はじめてにいとなるものだ。

　のは、をふことである。をふは き、きなのだ。ききは、いつはりを さず、をさず、ふしだらをさず、りや、 をなめることをさない。しかもやにしてはとして として、して一もかないことをずるものである。、は このききよりするものであるが、こののちのは、にうやうやしさと つゝましやかさである。

　つたがりや、にされつゝあるののをむ。

『國民新報』1940年4月14日

基本禮儀　――青筋を立てる必要なし――[[11]](#footnote-11)

しいといはれることは、にしいことである。は そのをらせ、らせるものである。ことに にするにいてりである。は をんずるであるが、らぬのでは だ未だにだとはいはれない。

　のは にのをすることであるが、そのとなるものは『ありがたう』、『どうぞおに』、『みませぬ』で きる。しかして、このを ばかりでなく、とととをはせて はすことをとづけるものである、かゝるけでさへけば、のへつても しいとはれることであらう。

　からをへばず『ありがたう』といふとに おをする。ばかりではない、したことをしてつてもすることをれてはならない。のを りすることはでない。ずのを ふべきである。ならば 、ならば、すべきである。などで、をぎ などくはへて、をくがきに しきりで、おがれると へよう。洋はおのにあへば、ずを するのであるが、つてほしい ものである、などで、のしきものゝへるのに のをんでるものがある。そのが れないではないか。やなんかで、しあひへしあひ、をふざまは のやうでにしい。にそんなをじたとて 五とがかるものではない。にいにへばりついてゐたり、いをらうと になるなどれたあさましさである。をけてきながらそのにちがつて で二つのりにぶらさがつてゐるなど[、]なんとなことであらう。はたののにならないやうにと をるはずからはれるになるであらう。

　來にをいたり、のひがらをてたりするのものが 々けられる。がののおと へるやうになることが、それほどしいことであらうか。にきふはてがで ひだとへないものだらうか。や、のや、花がのののやうにに はれないののではないとはねばならない。してやのをけ のをしたものにおいておやである。

　まかりつて のをむのそゝつかしさはにもあるものである。さうがみがみるにも ばないではないか。『すみませぬ』、『いゝえ』で、のきさうなものを てゝみふなど、よくよくのんきなである。

　ほんののだ。おに をり、おににをらうではないか。

『國民新報』1940年4月21日

青年の心一つ[[12]](#footnote-12)

　ヨーロツパは とうとうになりました。にする のによつてはわがもたなければ ならないやうになるかもれませぬ。それは一はののためであり、一は洋ののためであります。でありますから、が のによつて、一に したとしましても、まだまだわがにはいろいろなきながされてゐるであります。しかして、かゝる きなをするには きながとなり、きなを するには、のをれた一が となるのであります。こののをにして、のを するは ないのであります。このがうまくされゝば、わがのは 々になるのでありますから、これはといふものではなくして、に千一のであるのであります。

　このにり、ににおひしたいことが あります。それはかと しますと、〝として一をせよ″といふことであります。のとしてのととをいやがにもめよといふことであります。

　のは のの三の一あります。だからの、くとも三の一をするやうに せよといふことであります。、そのの萬にける、にいても、、、そのにいても、くもが、の三の一をするで かうといふことであります。

　一、一の ありがたきにより、は とのになつたのでありますが、にになるとならぬとは、一につての にあるのであります。そのといふのは ではありませぬ。によつて、たるをすことであります。はによつて、はにくことにより、はのにより、はにしみ、にすることにより、そしてよりもづ をもしきにりげることによつて、としてのを はすことであります。

　ところがにはまだをてないものや、なをつてゐるものや、わきののきをつて、きずられてくといつたやうなえらないのものが、あるやうにはれます。これはになく、しく、けしからんことでありまして、かゝる、なを一するいがにの一つにつてゐるのであります。

　。ののをかなぐりてゝ、一 下のとしてれかはるようしてさい。

『國民新報』1940年4月28日

心を治めよ[[13]](#footnote-13)

　はの にいて一のをなさいましたが、そのは、のためには、としてののを[[14]](#footnote-14)せねばならない。それにはにけるもさることながら、のがであり、しかもそれはのをするに うてなされねばならぬとされました。それらののにをするに、づをめねばならぬとされたがあります。

　とひ、とひ、とひ、とひ、いづれもをするからするものでありまして、このがめられてゐないから、とか、とか、とかいふ、さまざまのはしいことが るのであります。そればかりでなく、のめられてゐないは、して、としてもとしてもとしても、もしく、につになることはないのでありますし、またの一もみじめなものに ありませぬ。

　しからばをめるためにはどうすればいゝか。一ににいて、をみそなはすのであります。これはなるでは なくして、たるでありまして、のをじつじないものに はないのであります。かういふをもつてゐて、二六くくをくものは、おのづからとからとをして萬の信とを、なすことすべてがえるのであります。でないは、よしんば一はうまく くやうでもしてきはしませぬ。

　二には、にされたまふ、といふであります。きかれ小さかれわれわれは、からかをしかつてゐるので あります。われわれがのつとめをするとしないとは、ちにのにき、それが はに、われわれとのとなつて つてるものであります。一[[15]](#footnote-15)、しくればわれわれののもももすべて、からかつたものであります。もしこれをせずに、これがすべて のものであるとへるものがあるとすれば、それは につたで、でなければ であります[[16]](#footnote-16)。でありますから、でな　のといふをもさぬといふことがわれわれのであります。かういふさへあれば、や、や、の一一も わがのものとして、また われわれのや、われわれをものものとして にし、さないやうにすることでありませう。

　！はののみであり、ののであります。した二つのをしかとして、すとも これをさずにをめてさい。そしてのにするとにをあらせてさい。

『國民新報』1940年5月5日

國民の保健と精神[[17]](#footnote-17)

　はであります。はのであり、にのであつてが[ら] にしなければならぬのでありますが、に五二日から八までの一をめて、のにするをくしよう といふのであります。だからはこののにふやうに、の、の、に一ののになる、ののためるだけのをうべきであります。

　一にのためになのは、はのによつてもされ、もされるといふであります。それはのになのあること、ちは六十、は五十、わがは四十といふにのさがふこと、また、そのののためのやのによつて、そのがのびること、へばデンマークではデンマークの一によつて のが八年もびたといふことなどで、であります。日のにけるはのそれよりも、ずつとちて三十年ださうでありますが、がしてのためにさへすれば、くものたる六十年までにをばすことがるのがで、それはのののにあたるであります。

　しからばにすればこのはせられるかといふに、それは一にしていへば、のであります。といふのは、にふやうにすることでありまして、もつとにへば、やのをにしすることであります。そのでも、のからまして、やにはをするものがくあるのでありますし、になつたのにもまだまだな、なが々されてゐるのは、にでありかしいことであるとはねばなりませぬ。にののとなる のにいてりであります。年々萬のがののになつてんでき、またなぬまでもなとなつて くのであります。

　二にののためになのはのであります。と。まづのらかでないものはにかゝりい、[精神が] のとなることはもがすることで ありませう。『清心寡慾は長生の術』といふがありますが、のからしましてもとのもなたるはのをとするのであります。いをもつてゐるものがいでありながら、くをつのはこのためであります。

　には にのちのさによるのでありまして、にをくとか、をするとか、のをすやうなでは、のはげられるものではありませぬ。すべてのはわがなりなり、なるわがなりといふがあつてこそ、はにされるのであります。

　はくは年はよりも、年は年よりもをなところにげませう。

『國民新報』1940年5月12日

[主張]　子供と青年[[18]](#footnote-18)

　『をにしませう』といふの[で]のをにのとづけたのでした。そののは にぎたのでありますが、しかしわれわれは年すべてのをのとてゐなければなりませぬ。はのであり、びであり、であり、であるからであります。われわれのすべてのやきは、からへば、すべてのためになされるものとふべきであります。われわれがなやをりげやうとして一にしてゐるのも、われわれのに、もつともつと なをさせやうといふことになりませぬ。

　かつてヨーロッパでは のといふことばがしたことがあります。それは をにすることにめたといふことで あります。それから はをにする色々ながつて 日にんでゐるのであります。の、の、のみ、の、の、の娯楽といふに、の では、を夫にし、かしこくし、しくするための くのしいがたし、また、大人々がを にするととを つやうになつたのであります。をてるにも の、のためのをり、にものための のをるといふやうなわけで、といふのがののとなつたので あります。

　ところがわがはどうでせう。五百萬のはげられてゐるのであります。にいて、がやかされてゐることにかけては、をぎるほどかもれませぬが、にされることからへば、てんで おにならないのであります。一のでは、のといふものが ありませぬ。はのであります。へつてはからめされ、へつてはからされるといふに ちくがないので あります。二にはのためのおといふものが ありませぬ。のべるものを　ちよつぴりつて くでありまして、のややがみられてりませぬ。しからばはどうかとふに、や やもんどのためのものでありまして、同のんびりめるところが いのであります。それのみならず、などではやバスなどの でも、のあるにしけられ、ひやられるといつたで あるし、また、はににするとか、くとかいふ かはりに、ふのでなければ、したりかしたりするので、かられば、のはに 四、るところ荊棘のなので あります。これでは、こんなにげられてはがに、に、にたうはずがありませぬ。

　年。もかくげられた をもつたのですね。こそきおさまや おさまになつて、いやたちのもしいになつてげませう。

『國民新報』1940年5月19日

[主張]　旅の美しさ醜さ[[19]](#footnote-19)

　をればこれです。、一これです。吾は[[20]](#footnote-20)すべてのは これのといふべきでせう。るにくのはのはきてといふでをしてゐますね。なんとさもしい、あさましいけでせう。

　やでにのシーズンです。たちの、、祭のハイキングやれのピクニック、またはのといつたやうに、にののいおのやうなものです。もをいてのではあるが……。

　はであると に健のためにもなります。しかし、はであることもれてはなりませぬ。やのしさをはふのがであるとすれば、やののありがたさ、けをずるに、があるです。やはであるとに です。です。吾はしきや にみるに のにる ないおそれおほいになることをれますまい。

　かゝるしさがしめるのは のみであることをれますまい。ににとをへたまふの みをれますまい。そしてよくをひ にへまつりつゝ、てののをした やのをれますまい。これだけのことは 一、行れてはならぬことでは ありますが、しかしや勞のしさ[で] 々れがちになるのは しいことであつても、むをないことであります。しかし のはそれとつて、すべてのの はしさかられて、のんびり、ゆつたりした でゐられるのですから、かゝるにこそ 吾はいかなで、しんみりと、ややや のをじはひ、するなが るのです。そしてにも、をもつて をして、これらのにするい をゑけることがるのです。

　の一一もしませう。にしませう。のらぬやうをみませう。のなどにして、からるのびをねないやうにけませう。いやでにたのをるやうな ことはしますまい。に、おにびをへふやうにをひませう。できふに、の一や一をしませう。の、のにものをすことは なんとしいことでせう。

　やでは にととそのものにならうではありませぬか。にいては、のをばがにじたなおさまとひませう。そしてのをひ、とのをもつてこれに しませう。にいても に[、]にしてはのこと、そこのたちにも のをもつてし、これをいたはりませう。

　かういふけで、一つのをへたら[、]のびはにきく、のは一とまつたことでせう。

『國民新報』1940年5月26日

[主張]『尚氣節、廉恥重』[[21]](#footnote-21)

　五月二十二日は、くも年に をはつた日で、め にいて 五十万年は、、、によつて、このきみことのりに ひたてまつらんとの をにし、に、そのと々しきをした。

『ニヒヲヒテ ノヲニセムトスル タルメテク タルダシ シテ ノニ 繋リテ年ノニリ レヲビヲンジ ノニ稽ヘノニミノヲニシ ノヲジルヲハズ 嚮フヲラズ ノヲシヲメヲリ ノヲシテ荷ノヲクセムコトヲ セヨ』

とうた。

　年たるものにこのありがたき みことのりをにしにしたてまつつて そのをしたてまつるべきである。

　まづすることが であつて、へし繰返へし してゐるにれた き御をしたてまつるのである。

　かれこれと をしたてまつるのもきことではあるが、に

『ヲビヲンジ』

とうたことにき、の年のをしたい。この二つのは年ののであり、またとしての一のであるやうにする。

をぶとはであるか。それはにいては、のためにもをもげることであつて、ちにずることである。しかしてにいては、にはにはれずせず、には、とずるところはをみずしてすることであるとする。さればこのこそはのであり であらねばならない。

にをんずとは ういふことであるか。これは、、、などにするをとにはぬやうにする ことであるとする。をすることがあつてものをまぬ、といつたであるとする。のがになつて、り萬につた、年のなが、かゝるのにすることを められふたことでにおそれおほいみである。

はくは年よ。をびをんずるをへて のをにするをくするものとなり、ありがたきにいたてまつらうではないか。

『國民新報』1940年6月2日

[主張]　間違つた考[[22]](#footnote-22)

　一というふことに して、のの一には、つたを してゐるものがある。一は をへることだ。われわれが一となることによつて をるかといふのである。ひかへれば一をへるに[[23]](#footnote-23)ともはつたことがない ではないかといふのである。このは 一一あるやうであるが、そのには ながんでゐるのだ。

　はので、に にれかはらう、しもされもせぬ 一のにならうとの、しいをなし、その にうてのをめるといふ であつて、まださうなつたのではない。われわれ がのから、われはなり とじ、また、われは一のとしての をなしたりとするやうに なつたに、めて一はするのである。もし からにしてのが へられることがありとすれば[、]それはち そのにいてゞあるべきだ。るに 一運動のにいて、にの をにき[、]それがにへられないからといつて がましきことをへるやうでは[、]それはに あさましきりで[、]そののとして[の]がはれると いはねばならぬ。

　われわれはにから、のとにせしめられてゐることを、ありがたくこそふべきで、も 一してはをすきをつてはならない。

　をめてをつといふ。われわれが、にいて、にすべきことは、の、、とそしてとである。しくくあるをして にげやう といふ一もあつてはならない。われわれは、このりののととでは まだのにつ一のではない。、相な月日をしてきし きげてこそめて のたるにはしきになるのだ といふことをにしなければならない[。]やつとだ[、]まではまだまだだといふ をめてはならない。

　氏にしてもさうである。のでは われわれのために をきのをせしめやうとしての であるから、んでんで、このけにずべきであつて、かうしたら にどんながあるだらう、などと さもしいをしてはならない。のになるとして、またはとして、しくにりすとして、一日もくなすべきである。日な、ひきずられてかうといふやうなは、にすべきなといはねばならない。

　をへることはでもなければ でもない。もてわれわれのなすべきことを なせばいゝのである。してわれわれやのを におせげやうではないか。

『國民新報』1940年6月16日

[主張]　心と顔と福[[24]](#footnote-24)

　孟子は〝そのを、そのをけば、んぞさんや″といはれた。付とにそのがれるといふのである。これはで、のは、そのののとののだ。それはばかりではない。だつてさうである。

　〝、″といふこともあるが、の、のはいつかはをはすものである。

　ので、一にぜられることは、そののがつてゐるか、ふはふはしてゐるかといふことである。るとはをつことだ。にして、またはるのにいてかなをつてゐるのにはのやうなきと、すべからざるがはるものである。が、しをたないものはきよときよと、ひよろひよろとしてのをし、よしや、きとをつても、それはとらしいものとなつて、かへつてそのをはすをずるものである。

　これはりもさず、とりの ひだ。はからずるものであつて、なきものにはありない。ある、あるの 々のをれば、そのの がなはれるさうであるが、これは さもあるべきことである。、、、、といつたやうな へをしたものがく れば、その、そののはするのが である。一や一のについてもじことが へるのだ。これはしてやぎではない。

　の々のは 三十年間にいて、のをした。めは であつた。には、のを したことがある。また一はにた、れた をしたこともあつた。マルキシズム のには、のをらした こともあつて、さういうを々るものさへ あつた。

　ところがでは、かな、ながえてて 々はなをつやうになつたようである。ちにいて もありみもあるといつた 々のをへてたようにはれる。これはににまつたで、なをつものと はねばならない。

　し〝ある″といふにてはまだまだである。どうもがきぎる。ひや ひがぎる。としたところが りない。をへたとがりない。はなくなつたが、がくなつたのではないだらうか。ひきさうなが えたかはりに、やをみさうなが えたのではないだらうか。すれば、そゞろ、とのをさせるやうな、で、しつかり[し]て、しかもされた、が にしたら、どんなにか しいことであらう。

　はのれである。ことに きのとをらう。

『國民新報』1940年6月23日[[25]](#footnote-25)

[主張]　至誠の祈誓[[26]](#footnote-26)

　六月十九日、をめ、 にいて、一に のためをし、いて ののためのがりはれた。にいても このはじめ 五千し、二千六百年の を、にへたてまつらんことを つたのである。のにいても のがあつた。

　一のの このはこれからき、をうて をぶことであらう。そのとはんであるか。それは 八紘一宇ののである。その一として ががつちりと一となることであり、が のにいて、のに むことであり、アジアが、のより れて、わがをとして、ととを する ことであり、んでは、、の 、、によつて、より、へとにをねつつあるが、のへと すくひげられることである。これが、われわれ一のがにへたてまつらんと つたことである。んたるにしてなひであることか。

　さて、ならざればなし。にしてくをする。もしわれわれのひがりにならないためには、われわれはのとならねばならない。一のつて一のりなく、いなく、そのものにならなければならない。のにてをもつてしらう。なきものにはえない。なきものにがえないのとである。あるものゝはずをかす。なき詣をするやうなは、のおにものおにもたない[。]にたないばかりでなく、のになることだらう。

　ものである。もなくてはならない。、もかねばならない。しかしそれもあつてのことだ。なれこそ、あるがにである。にずるのものはであり、一、をくするのも、である。[、]をするはこれにあらずしてんぞ。なき同になんてあるものでない[、]じてこそし、してこそだ。しかしてはからのみる[、]もてじてこその一もるのだ。

　われわれはのに をしてせねばならない。それは りにするである。このまでの をせねばならない。をるで、われらのなるべきにをつたりや、の をば、こそぎりらなければ ならない。そして二とわがにがくひ、わがより りのがれないやうにはなければ ならない。そして、わがもも そのものになるやうしなければならない。これこそは ののではなからうか。でを つつもりで、わがとの僞にめをささう。

『國民新報』1940年7月7日

[主張]　功利主義の没落[[27]](#footnote-27)

　ののは で、ベンサム、ミルがそのである。の がや のであるとするところまではいとして、そのと ふものがのにありとした スペンサーにりては[その極に達したと云へよう。] [[28]](#footnote-28)はにて デモクラシーをする のともなつてゐるので あつて、のを〝の″にいて めるのである。〝″といふがにもにものになつてしまつた。

　こゝにいてはものく のくのとせられたのである。してこののを のにまでげたのがにならない。

　デモクラシーは を産み、はを産んだ。を つきつめればにむことは で、かうなれば、はの へのといふ々しくも々しきととをし てしまふことゝなるのだ。

　そこでにいて につたのがイタリーのムツソリーニのフアシズムで、は、、の をば、よりへきしたのであり、は の、引いてはのののためにくべきものである。ついでつたのは ドイツのヒトラーだ。この二はをとのへとゐてしたのであつた。そしてつたのが のである。

　がにめるものが、じく ではないかといつてはならない。なる、がののをなすで あらうことは、にせられることであるが、が ので、きげたを せしめること、そのに、は 一のをめねばならない。もしが、につて に、の、をてゝ佛のなるに るならば、はからず、またのを むことであらう。はがあくまで、のよりれずして のをすことをらざるをない。

　さてわがが、や肇国の をじて、アジアののために ちがつた、アジアをの とすべきはふまでもないが、に いては、とをじうする のたるのにつべきは のである。にののにいて、かのは なることをなしたるか。は、蔣をけ、われに した。やにいて、にいて、つひには、らをせんために をしたのであるが、ににへぬ ものがある。のにつて がわれにをしたところで それがのぞ。をへぬのには、によりて さをらしむべきである。んや、のなる のに しみつゝあるアジアは、やわがにひのをめつゝあるにいておやである。

　のは した。のにはよりさしることであらう。

『國民新報』1940年7月14日

[主張]　一兵卒の心構[[29]](#footnote-29)

　四、はアジアののをした。なんといふ大きなであらう。しかし、アジアのまでには、まだまだ遼だ。蔣のや、蔣の、ののためにはも、まだまだいくつかのなるものがなくてはならず、[を]一したに八紘一のにつてからが一一のとなることであらう。しかしなんとつても、三年の[[30]](#footnote-30)はなるものであることにりはないのだ。

　さて、のをみるにり、もつとも々のを搏つものは一の構である。そもそものは、にける一の構にあるものだ。一の構は決してのみの構をすものではない。はより、にるまで、そのにのはあつても、一の構にいては一つなのである。といふものはするに一の構にならないものとふ。

　しからば、一の構とはんであるか。それはぜられたるポストにずる構である。一あるをぜられたからには、ののあるまで、一もいてはならない。たじろいではならない。があつてはならない。それこそ一、そのポストをり、そのためにのをして、そしてしてにむといふなのである。このに、のがあらうがないではないか。こののいはち、いはけるに定まつてゐるのだ。

　ところが、このはにでばかり、になるものではない。にいては、ととをはず、の一一に、この一の構がになるのだ。にの、のにいてりである。

　われわれはのにいて、ドイツのが、そのたるとたるとをはず、にこの一の構にえてゐるかをすることがた。しかしてその一の構が、のににかしいをしたかをすることがた。ドイツのににたものをしたである。

つてわれわれをみるとき、してたるところがないだらうか。三わがはによくつてれた。にするり、一の構にいてはないことをたのであるが、われわれのには、まだまだりぬところがあるやうながする。ことににいて、さうではあるまいか。一まらぬにいて、日や交のだらしなさにいて、のにいて、のにいて、われわれは一のへのりなさをにずるのである。かくあることはのへ、のへであつて、にけるのポストをした一のへとははれない。なるでも、さうなくてはならぬのであるが、にのにいてはそれがであれ、であれ、はたまたであれ、すべてわれわれにけられるのはでなければならない。のは、一の構へでそれにへなければならない。一一のをにくことをさない。ちにぜられたポストにいて、ぜられたをさなければならない。しかしてそれは、してむのものなのである。

四のにいて、よ、一のへをめよう。

『國民新報』1940年7月21日

[主張]　政變と吾等

　がをした。これはにらんがための一のとせられる。のにするがになつてゐるのだが、それは日より日へりくのの一にぎないのであつて、げられた一がどのからであつても、それはのであることにりはないとふ。

、ののやがのむにつれて、するのはであつて、のはの、は、そのは、、そしてには、、などをむなるをまざるをないやうにしてたのである。く行くははまでもへて、とらずアジアのといふにすることもありるとふ。またそこまでかなくてはではない。

　のにつれて、、、、（もう々などゝをふにもるまい）がわがのといふことがかにされた。しかもはのといふにをして、これらのにしてめてなりをしてたのである。ところがルート、、ビルマルートなどのによつてかにされたやうに、は、のなのをいことにして、あたかもをふがく蔣のをしようとせずつて々をへる一であつた。かのなどはとにわがによつて目茶に打ちのめされたるにらず、にしてのをめない。これはそもそもふののによることで、がそのひよろひよろをにしてを睨んでゐるのもそのためなのだ。ではとのを一のとし、をしてそのにらしめたのであるが、それによつてをたか。

　それはビルマルートのにする、三月はどうせのにぎないのだから々の、をにしたほざきにぎないではないか。

　はもつとののさとにのとをしなければならない。そしてこののためもつとを一ししなければならない。がになつているゼントルマンに一もくいてつて、にえるゝにをらせなければならない。そしてもつときつぱりした、りいをして、もつと、をし、、アジアにをけ、のきをしているに一をはして、にをせてやらなくてはならない。さうするにはこそ千一ので、このをしたらを千のにのこすであらう。はしくとがつちりをんで々にするをすべきである。

　それにしてもはのだ。千年ののために、一、をてゝをつてつたの一となるをすることがである。なるにもへばう、なるをもげようというがつてはじめて、このはしげられるのだ。

　のよ。のは々きをへるのだ。やな、なをあつさりとして日ののをてかゝるである。このたずば吾はぶ、このたば、吾にのとがあるのだ。がどうふだらうなどにすることはない。はで、のを一でつたでしようではないか。

　もしげよう、もしげよう。ありとあらゆるをのためにしげるはたのだ。

されたのと、まつたとはにたるととをしてゐる。わがの千一のは、のためには二に千一のなのだ。

『國民新報』1940年8月4日

[主張]　新しき自慢

　やをげてをすることになつた。のまかりならぬ、のまかりならぬことになつてゐるのだが、が品をすることにはない。奢侈品猶三ケ月に、しこたまをて、せびらかさうといふもないとはらぬ。

　のをするのはおのなすことであるが、をつかはないのはわれわれ々のけであるべきである。これはおのためであり、のためでありのためであるのだ。がかであるからといつてひたいにつかつていとふものがあるとしたら、はのつとめをせざるものだ。

　、といふことはいづれの、いづれのにいてもであつて、これあるはり、これなきはびた。、でびない[國]があらうか。

　のはぎた。やのである。になをつたものは、のにいてはにひ、きにされてゐる。やでは、一のがづかしくてにられぬではないか。

　をにつけて、をつてくものは、もうらなくなつたやうに、なもの、しいものをしては、あるものは、のにはられないがづいたのだ。やののに、スフの、そしてと、これこそは、のらしいなのだ。もしそれ、スフのがつぎはぎになつてゐるとしたら、もつとにすることだらう。

　しかるに、やれがどうの、がどうの、そんなものをにけて々たるやがあるとしたら、そんなものは、からずにない。かういふはりでへくべきである。そしてから、かゝるがをつやうにつとめやうではないか。

　はいものでにはせよう。にして、れないやうにをけやう。やぶけたはいはせ、つぎしてつかはう。もをし、でかう。さうして、われわれがを、することによつて一にいては、そのをやのにし、他方にいては、をしよう。にいて、にいて、ややてのにいて、これをせしめよう。

『國民新報』1940年8月11日

[主張]　町洞聯盟常會

　のにおけるはにましいものがあるのであるが、そのもなるの一つが、毎月一日日のであることである。がこの日の一つのにまつて、、、、、合をなすことは、にと、のためのである。

　ところが、このもつときなければならないことがある。それは、にはずがすることだ。そのにいて、をもつたがしてこそのがせられるべきである。しかるにのをれば、、、にをたせてをさせるものがいやうであり、しかも、かゝるすべからざるをもつたものはにも、からものものにいやうである。かゝることはに等のとなるのみならず一にをぼすことがなくない。にであり、ならば、てして、にし、のにをるべきである。が、かの、またはのにも、、小をにさねばならぬむをざるにあるとすればだ。

　次に、、、などのためののんどはのにつてゐる。んとかして、の、を月一してはどんなものだらうか。月一日がののならば月十五日あたりをのとして、はのはないにあるだらうから、などのをんでし、もつとけたはせや、の一つかせてもいとふし、、などせたらだらうとふ。の一をはしたいものである。

　かやうにのととが月一まるとすれば、まることだけですでにしたがあるだ。でよ、でよ、はらず行してしいものだ。

『國民新報』1940年8月18日

[主張]　八月十日の喜

　二千六百年にり、に三十[]年にる。十五年二月十一日のよりめられたのは、八月十日の十二をつてつた。のがするまでには、まだの日をするであらうが、の五であることは、かのやうである。十がをしなかつたことが、ともへるが、しかし、わづか六ケ月のに、一千二百萬のがをしたことだけでも、まづにすることとへよう。しかも、のがぢられるといふではない。もへども、のをていくらでもはるのであるから、らくは、一二には、が、にふさはしいをることになることゝふ。

　さて、はになものであつて、にのをけかへたといふだけではない。このばしきにあたり、一のをひしてよう。

　一われわれはによつて、七百ににしてゐたをつたのだ。ののは、そのにしても、にしても、にしても、にしても、のそれとのないものであつた。にも、にもはじれをんでゐたからである。それが思へのにより、われらのをれてしまつたのであつて、にの三には、があつた[と]へる。のによつて、このひからされただ。

　二には、われらがとしてきんと[する]いとをによつてしたことである。われわれのしいをげる[、]今[一]度としてのをにし、にりなきとにるであらう。

　三には、よりにつたことだ。われわれはしいのをしたのはわれわれであるが、それをされたのは、のである。ちわれわれは　よりされたまうたをつたことになるのだ。われわれはによつて、われわれをにげまつつたのである。

　四にはのだ。はのであつて、のくのではない。こそのである。なるからたものでも、るのにれば、そののをり、つてそのの、にふのである。はのだ。氏をもつたとのとは、そのにいて一ではない。のによつて、の家も日なになつたわけである。

　とは、してにをすることではない。として、として、しいをするであり、であるのである。

『國民新報』1940年8月25日

[主張]　女子教育

　やをげて一をやつてゐるのだ。ももをきして八紘一宇ののにてようといふのである。、、、すべての[を]してのにしようといふのだ。一にしてへばのにをれるをることである。をにして、をすることは、もはやのにはしないのだ。

　だつてこののにあるのではない。むしろ、はにべてのとがである。それはやのからて、れてゐるをし、そのれただけをひいて、まだそのに一のにしようとするからである。

　そののとなるものは、とになることであるが、のもなはれはにすることであり、へののもなはれは、日のとなることふまでもない。しかしてこのことたるやのけでなくてはならぬのであるが、にそのとなるものはである。そのでもである。そののやがののことであるばかりでなく、がはとなり、はにるのも八りはのであるとふ。そのすべからざるはやそののいのだ。

『さん、にかない？』

といふのはにならぬをへるであらう。

『あの、なしてゐてにもかないのよ』

といたちからはれるとしたらどうだらう。のいのは、がしいためだといふ。そのしいはいをますからだ。のも、はとして、はとして、として、として、きがらしきになるやう

まさねばならない。

　だからがだ。たるやないいのがだ。だ。でもいゝ、でもいゝ、一日もく、のにをしなければならない。にをせしめることは、にらぬがあることゝふ。

『國民新報』1940年9月8日

[主張]　矢繼早の喜び

　にをすべきことがとしてされ、これについて、より、それがをぜられたことをした。、と[に]、一のの三といふべきである。しかもこれらのが々三年ににをぶにつたことはなんといふであらう。なんといふありがたさであらう。

　がいよいよされるまでには、、そのののため、の日をすることはであるが、のとしてへられるところによれば、二十五年までにはのをるである。りとすれば、より十年には、のはをはずをけることゝなるわけであり、それまでには、日の四五よりして、十七年には六にり、かくのく年々のとをして、くとも二十五年までには、のをるといふのである。

　いふまでも[な]くは、の、をつくることであつて、はにをしてにけられせられるものである。はしてののをへるためではなくて、になをるためになされるものである[。]であるから、にをへることはそのをにふさはしきにてるためである。

　これはににしてのみはるべきではない。はのこと、にいてもである。[に]のをがすのはそのにして、をするゆゑんであり[、]つてにすることによつてのをし、いはゆるれたあるをうするのである。このはかのいはゆるにははつきりしてゐなかつた[。][、]がをけるのはのをたさんためののやうにへられたもあつた[。]日といへどもかゝるつたをいてゐるものがないともらないが[、]かゝるはにるものである[。]をかゝるよりめるものがあるとすれば[、]それはすべからざるといはねばならぬ。

　がになるにあたりにするは、しくのをし、のをして、のための、のためにせんためののをにすべきである。

『國民新報』1940年9月15日

[主張]　個人の新體制

　わがはくをりり、、、、、そのをめたをするためにをつてります。とは一が一一となつて、をることであり、とは一のが、々そのにいてさんになることであります。にいては、もももももも、は、におけるまでも、までののをてゝ、さんになることであります。

　さんとはにをつてにつばかりではありませぬ。にいては、あらゆるがであります。もも、さんのやうに、のににするをり、がはれたるやにし、がはれたるに、をげることであります。までは、につをいては、われわれはにのをするといふであつたが、これからは、われわれ、一のとじく、のにつのであります。もはやわれわれにはかのもされませぬ。ももりませぬ。々とからるにしなければなりませぬ。をへとされたなら『はい』、をしてはならないとされたら『はい』、こんなものはつてはけない、つてもけないとされたら『はい』、こんなはめろとされたら『はい』、かやうに、すべてを『はい、はい』でくのがであります。をもされぬのであります。

　しかしわれわれはこのをびとし、としなければなりませぬ。なれば、これは、わがのためであり、われわれののののためであるからであります。かゝるなくしては、がとしてみつゝあるのはしげられぬからであります。

　だからわれわれはきついによつてのをらねばなりませぬ。まづ一のからきしませう。六の『きろ』のサイレンにずきませう。七ののサイレンにはずをしませう。ののサイレンにずをしませう。そのをしてるすべてのにんでしませう。そしてののを一にし、はたに、そのをせられたへでしてきませう。ではそのきはわれわれのためではなく、のためなのであります。をするのはをけるためではなく、をけるためであります。一にしてへば、われわれはやなのであります。はもうからをします。これからのであります[。]さんのく、またはの一のくをしてくのであります。

　のわがまゝの、のためのから、の、のにるにはとがでありますが、しかし、やこれはにななものではなくして、いやでもでも、さうならざるをなくなるのであります。にさうなるのであります。このしてにやるものにはのびととしてのがあり、らざるものにはなとにがあるべきであります。

『國民新報』1940年9月22日

[主張]　二三の提案

　ののためにはをうんとけなければならない。ののをして一、一またはのをけ三ケ月百五十のをやれば、一をらぬ子も日のとのがけ、三百のがえられ、そしてのやがまれるさうである。はににいて十ケみられてゐるののにてかなことださうだ。しかもそのは一一百でりる。のびにめたいものである。

　これもについてのことであるが、のとだけのとするところでは、々、へば一、のをきたいものである。ではがぎるれがあるから、五年なら五年[]といふにやればい。そして、といふにパートナーをつて、おにをしたり、また一でをいたりするのである。かくすることによつて、二の、をるとに、ではにをするをることがる。をねるにパートナー[]はしいになることだらう。

　七の、のは、にいてもしたいものである。りもも、ぱったりとまつたがい。はである。これはにあるものとふ。にのはしてゐるのに、でがやらぬといふのは、一にい。こんなことはややをしてをするやうに、一したらいにががることゝふ。

　になる、なるでありながら、みられないものがある。それはののなることだ。のなでは、やれだの、やれだの、やれだの、やれだのとにしいをつてゐる。それは二三ののとのためにされるなのだ。かゝるあるがために、のは一つかさないでゐる。ののためにも、かゝるはさるべきで、そのはなることにりけることがる。

　にりは一ケ月一しかつてないところもあり、にすれば『がない、をせ』ともほろゝのである。がなければ、あのとだけでもしてひたい。そしたらわれわれみるであらう。一月もそのまゝにしてくことがういふをくかは、ものことゝふ。

『國民新報』1940年9月29日

[主張]　お役に立とう[[31]](#footnote-31)

　青年訓練所の訓練生の一隊が現役軍人に率ゐられて南小門の坂を上るのが見受けられた。青年に軍事訓練を施し始めたのだ。これは全鮮を通じてなされることになつてゐる。すべての青年は軍事訓練を受けて、何時なんどきでも御国のお役に立たうといふのである。

　御国のお役に立つといふことは、單に國防の一員としてばかりでは無論ない。農場、工場、官廳、會社、その他ありとあらゆる職場に於いて、自分の役目を果たすことはいづれもお國の役に立つことではある。しかし、將に高度國防國家たらんとするわが日本に於いては、國防の一員としての務めに服することこそ、最高のお役に立つことだ。現在軍籍に身を置かないものであつても、何時なんどき呼ばれても直ぐお召しに應じて、お役に立つだけの用意が肝要である。これは特に青年の使命であり特權でもある。青年たるもの平素體位の向上を計り、艱難辛苦の生活に耐へて一死以て皇恩に報ずるの覺悟を固め、修錬おさおさ怠らざるの心掛に生きなくてはならない。

　新體制の準備が整つた。近々愈々中央幹部の組織成り、ついで地方の組織も成つて一億一心大政翼賛の曠古の大運動の車輪が、地軸をも揺がさん大響きを立てゝ、運轉を始めることであらう。そしてその車輪の轉ずるところ、東亞共榮圏の地平らし、基礎固めが、ぐんぐんと進捗する譯だ。

　さて、この大運動の、生命は何處に發するのか。それは一億國民が八紘一宇の大御心を體したてまつり、各々その職場に於いてその役目を見事に果たすことに於いてだ。これを職分奉公と名づけてゐる。國民の各々は老も若きも上なるものも下なるものも、この大機關の齒車であり軸であり調革であり釘である。一つだつてなくてはならぬことに於いて、同じ重要さがあるのだ。

　それにしても、その中心はやつぱり青年にある。國防線上に於いては勿論のこと、産業に於いても何に於いても、その働きの主體は青年層だ。青年に力あつて始めて國に力あり、青年の使命や大である。

　すべての青年は各自御国のお役に立たう。東亞共榮圏完成のありがたき國家目標のために何時なんどき、如何なる方面の職場に召されても直ちにお役に立つやう用意しよう。心の用意、身體の用意、家庭の事情の用意もして置かう。國民は誰もがさうであるが、特に青年は、その有するすべてを――身をも心をも子女をも財産をも　陛下に奉還することから出直さう。是新しい日本人としての再出發なのだ。凡べては　陛下のものである。われは　陛下のものである、といふ信念から再出發しよう。そして　陛下の御召しに應じお役に立ち申すことを一生の目標とすることである。

『國民新報』1940年10月13日

[主張]　街頭の訓練

　七の、のをで[も]してほしいものだ。、、で[ば]かり、やつていゝといふのものでなくて、たるもの、なるにあつてもずこれをすべきである。しかるににいてこれがはれぬとはにないことゝいはねばならぬ[。]『にて』とはなるにあつてもといふことである。

の七のサイレンがりめたらにてはすにばず、にいてもは、はしていてゐたものも、一にぴたりとまろう[、]そしてにひつり、のをじたてまつり、のをにきたてまつりつゝしやう、サイレンがんでからをけやう。、はまるにもくまいが、、は一にすべきである。、などではに、これがされてゐるさうである。にいてされぬがにあるだらうか。一にの一をす。やだけでがはなければにもならないばかりでなく、てにをふことゝなる。であるからか一つめたら、にすべきだ。七とのにける一などはにそのとすべきであらう。

にやのためからのがにりむのであるが、このこそかゝる練のをすのだとおもふ。それがとしては、そののの、、、四、、十、、、そののなど、だかりのいに、七とのにをし、をり、メガホーンにて、

『七のサイレンであります。どなたもにひたてまつり！』

とか、

『のサイレンであります。どなたものと靈のためにの』

とばはるやうにすればい。それはにかにもしくぐましいのであらう。

　一はすぎるといふ人もあるが、そんなことはない。わづか一日二である。一をしたてまつり、一のためにることはすぎこそすれ、すぎるなどいふべきではない。

『國民新報』1940年10月20日

[主張]　若人の感激

　十月九日には年のがあつた。にをひ、四千のがたるもく、にはせて、々とするは、まことにそのまゝであつた。あのにをはせたらになるのだ。なるをものへるには一もさせはしないんだと、いをけないものはなかつたであらう。あれとははなかつたとしたものもあるであらう。

年にいては、

「年のはとの一となるものである。つてのはとにをするがにらくはこののためにのとをもつてのとしてのをせよ」

とへられてり、年には、

「年は、のにをけたるにし、の彌榮を一するとに、々のをし、ゐてとしてののひをくし、々てに參じんでにひたてまつらんことをす」

とある。

　のと年のとにぴつたりと一し、そのをるゝもない。一つの一つといふべきであらう。

　たるもの、よろしく、このをすべきである。ちたるのとをてし、『八紘一のにり、の一に參じ、のにせんことを』し、『のを』し、『のにめ、をのとし、つてにせんことをす』べきである。これのはすべて、されざるであり、、であることをくかにすべきである。

　にして、いまだのには、がにへるものがあるかにはれてゐる。は、よろしく、のをき、をへて、にはるやうをすべきである。一の年をもきりにせず、ひせぬやうするのは、一にのといはなければならない。

『國民新報』1940年11月13日

[主張]　新體制の倫理

はとなつた。とはか。それは、、つてにはのをして八紘一のをりげるためにをにすることである。

しからばにいては、はなるにるべきであるか、それはをすてゝ、をににげることであり、、をてゝをのためののためにぜしめることである。

『が』とか『の』とかいふへに『わがが』『わがの』をせしめねばならない。

これはしてでもでもない。りさうなのだ。えばをしてもののためにやつてはならない。

はのための一であつて、それはのためであり、のためでなければならない。

もさうではののためとつてはならない。それはのにはない。はびのののためである。、、なるでもさうである。

とは、をのためにすることであるから、はももであり、[は]のでもである。のはがから一おかりしてゐるのであつて、なんどきでもがとならばげねばならない。

ばかりではない、のもさうである。のはのではない。からおかりしたすめらのである。

のであり、のである。わがをわがとふことはであり、である。わがをににてげて、にげる、これがののである。からずがされるであらうが、わがのはわがなりなどとつてはならない。がにされた、わががそののでに[な]るとしたら、それこそ、にしたてまつり、ないことである。

にわがのことであるが、われもわがではない。時おしがらうと、をせからうと、とびをて、これにじたてまつらねばならない。一のはでありである。

のにあるわれわれは、かういふでなければならない。かくしてこそ、われわれはのをしたてまつるのである。

1. 「歌」の文字は誤植であろう。単行本『同胞に告ぐ』では消されている。 [↑](#footnote-ref-1)
2. この文章は単行本『同胞に寄す』に収録されていない。 [↑](#footnote-ref-2)
3. この文章は単行本『同胞に寄す』に収録されていない。 [↑](#footnote-ref-3)
4. この文章は一部「わかちがき」がなされている。なお、新聞掲載時はタイトル以外「智識」と表記され、『同胞に寄す』ですべて「知識」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 「世事にる」は新聞で「世事にはる」と誤植され、単行本『同胞に寄す』で「世事にたづさはる」とされている。「屑し」は「いさぎよし」と読む。 [↑](#footnote-ref-5)
6. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 新聞では「けいじ」とルビが振られている。 [↑](#footnote-ref-7)
8. この文章は単行本『同胞に寄す』に収録されていない。この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-8)
9. この文章は単行本『同胞に寄す』に収録されていない。この文章は一部「わかちがき」 [↑](#footnote-ref-9)
10. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-10)
11. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-11)
12. 新聞版のタイトルは「青年の心の一つ」と誤記され、単行本『同胞に寄す』で修正されている。この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-12)
13. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-13)
14. 単行本『同胞に寄す』では「完成」が「完遂」に変わっている。 [↑](#footnote-ref-14)
15. 単行本『同胞に寄す』では「一體」が「そもそも」に変わっている。 [↑](#footnote-ref-15)
16. 愚癡は仏教の用語で愚痴とも書く。事物の理に暗い心をさし、煩悩の源とされる。我癡あるいは無明ともいう。なお、この部分は単行本では「愚癡といふものであります」に変わっている。 [↑](#footnote-ref-16)
17. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-17)
18. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-18)
19. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-19)
20. 「吾等は」は単行本『同胞に寄す』では削除されている。 [↑](#footnote-ref-20)
21. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-21)
22. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-22)
23. 単行本『同胞に寄す』では「一をへる**と**と」に変わっているが、これだと意味が通らない。おそらく校正者が変更したのだろう。 [↑](#footnote-ref-23)
24. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-24)
25. 6月23日と30日の合併号。 [↑](#footnote-ref-25)
26. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-26)
27. この文章では全般的に「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-27)
28. この部分は新聞では脱落し『同胞に寄す』で挿入されている。 [↑](#footnote-ref-28)
29. 「心構」の表記は本文の一部で「心構へ」とされ、単行本『同胞に寄す』ではこちらに統一されている。 [↑](#footnote-ref-29)
30. 新聞では「三年の」と誤記されている。 [↑](#footnote-ref-30)
31. この文章は『國民新報』の影印本から抜け落ちているので、単行本『同胞に寄す』に掲載されたものを入力した。ルビがないのはそのためである。 [↑](#footnote-ref-31)